河北省県志にみる入声について

矢　澤　秀　昭

序

中古漢語より現代北京官話に至る韻母韻尾の大きな変化として、陽声～m尾韻母の～n尾韻母への転化とともに入声韻の消失があげられる。14世紀初葉の周徳清の《中原音韻》(1324) では入声は他三声へ派入し、消失したことを示している。(注1) あまり時を隔てない13世紀末の黄公紹の《古今韻会》(1297) では、依然として入声は独立して韻目を設けその存在を示している。しかし、《古今韻会》中における入声は、喉内入声と舌内入声、舌内入声と唇内入声の混用を示していることから入声韻尾の～p、～t、～kの区別はかなり弱化している。(注2) そして、明の楽韶鳳等の《洪武正韻》(1375) でも入声は独立して韻目をたてているが、それは全て喉頭閉鎖音となっている。(注3) およそ13世紀頃からが入声消失に至る過渡期といえる。また、北京官話を中心とする北方音系に属する地域でも、特に河北省だけに限定しても張家口、石家荘、邯鄲に現在なお入声の存在が確認されている。(注4)

本論は、入声の過渡期より4～500年時代を下り清から民国 (18世紀から20世紀) にかけての北方音系、特に河北省の入声についてその存在の有無と他の声調への帰入状況を探ることを主眼にし論述する。

資料は《中国方志所録方言匯編》(波多野太郎氏編、横浜市立大学紀要) の第4編 (第37号、1966年10月) および第5編 (第40号、1967年12月) の中から、河北省県志の特に語音だけをとりあげて整理された県志をとった。その採用した県志は以下のものである。

寧河県志	乾隆44年（1779）
玉田県志	光緒10年（1884）
献県志	民国14年（1925）
遷安県志	民国20年（1931）
獲鹿県志	光緒７年（1881）
霊寿県志	康熙24年（1685）
平山県志	咸豊３年（1853）
元氏県志	乾隆23年（1758）
新楽県志	光緒11年（1885）
定州志	道光29年（1849）
内丘県志	道光12年（1832）
大名県志	乾隆55年（1790）
贊皇県志	光緒元年（1874）

各県志の語音資料はいずれも基本的には読若形式をとっている。

例

a　昔読作西（大名県志）

b　日読作異（内丘県志）

上記の例ａは「昔」の字音が「西」の字音と同じことを示し、ｂは「日」の字音が「異」の字音と同じことを示している。また、この形式では音注しきれない場合は反切を用いたり補注をつけている。

例

c　独東胡切（献県志）

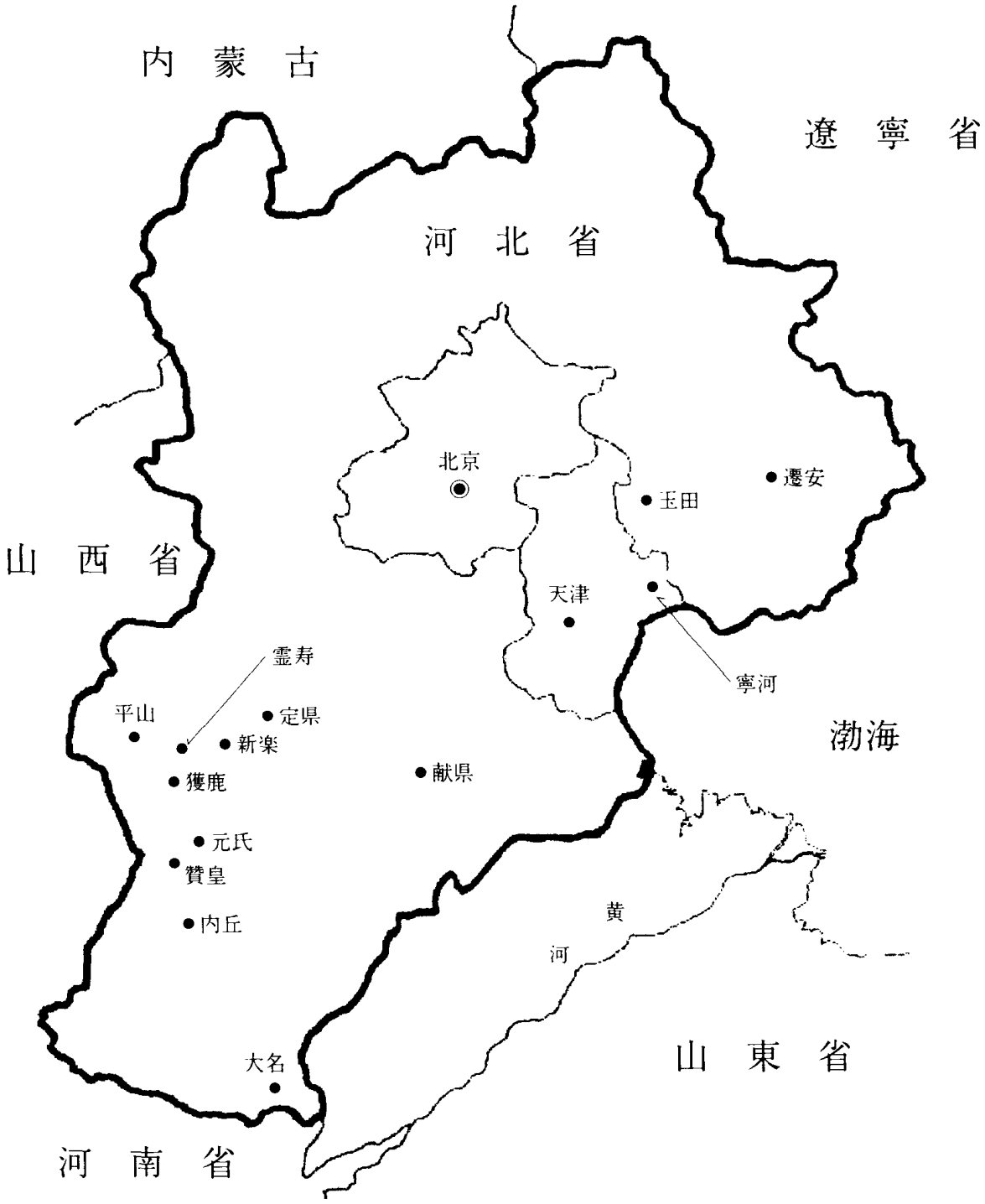
d　屋読作烏上声（新楽県志）

e　物読近五（霊寿県志）

上記の例ｃは「独」と同じ字音の字が無いため、反切（この場合「東」の声母＋「胡」の韻母）を用いている。ｄは「屋」の字音が「烏」の字音

の上声であることを示している。eは補注の「近」の意味することがあまり判然としないが、「物」の字音が「五」の字音に「近い」ことを示しているのであろう。

各県の所在地を以下に示す。



1　挙例および解説

I　現代北京字音と近似するもの

以下に挙げる例（表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）はいずれも中古音において入声であったものである。

表Ⅰ

例	1　習読作西
地域	霊寿　元氏　新楽　平山　定　贊皇　献
例	2　息読作西
地域	遷安
例	3　錫読作西
地域	献　大名　寧河　玉田　遷安
例	4　席読作西
地域	内丘　玉田
例	5　昔読作西
地域	大名
例	6　夕読作西
地域	大名
例	7　極読作幾
地域	霊寿　贊皇　平山　新楽　元氏　大名　献
例	8　吉読作幾
地域	大名　霊寿　贊皇　平山　新楽　献

例	9　及読作幾
地域	元氏　大名　献
例	10　急読作幾
地域	内丘
例	11　禄読作路
地域	霊寿　贊皇　元氏　獲鹿　定　新楽　遷安　献
例	12　陸読作路
地域	献　遷安
例	13　割読作哥
地域	遷安　大名　献
例	14　欲読作愈
地域	霊寿　獲鹿　贊皇　平山　遷安　新楽　献　大名　内丘　寧河　玉田
例	15　玉読作愈
地域	霊寿　獲鹿　贊皇　平山　遷安　新楽　献　大名　内丘　玉田
例	16　毓読作愈
地域	霊寿　獲鹿　贊皇　平山　遷安　新楽　献　玉田
例	17　浴読作愈
地域	大名
例	18　欲読作遇
地域	元氏

例	19　玉読作遇
地域	元氏
例	20　毓読作遇
地域	元氏
例	21　読読作都
地域	霊寿　贊皇　平山　定　新楽　元氏　遷安
例	22　濁読作都
地域	元氏　遷安
例	23　毒読作都
地域	遷安
例	24　濁東胡切
地域	献
例	25　毒東胡切
地域	献
例	26　瘧読作要
地域	霊寿　贊皇　元氏　新楽　定　平山　獲鹿　玉田
例	27　薬読作耀
地域	寧河
例	28　葉読作夜
地域	獲鹿　献　遷安　元氏

例	29　業読作夜
地域	獲鹿
例	30　屋読作烏
地域	賛皇　大名　献
例	31　屋読作巫
地域	遷安
例	32　雑読作咱
地域	霊寿　賛皇　元氏　定　平山　新楽　玉田
例	33　局読作居
地域	霊寿　賛皇　元氏　獲鹿　平山　新楽　定
例	34　菊読作居
地域	献　遷安
例	35　橘読作居
地域	遷安
例	36　雹読作包
地域	賛皇　平山　獲鹿　寧河　定　元氏　新楽
例	37　十読作時
地域	大名　遷安　元氏
例	38　石読作時
地域	大名　遷安　元氏

例	39　実読作時
地域	大名　遷安
例	40　拾読作時
地域	元氏　獲鹿
例	41　出読作初
地域	大名　遷安
例	42　匿読作膩
地域	大名
例	43　八読作巴
地域	大名　遷安　献
例	44　屈読作区
地域	大名
例	45　曲読作区
地域	大名
例	46　失読作師
地域	大名
例	47　掇読作多
地域	大名
例	48　七読作妻
地域	遷安

例	49　漆読作妻
地域	遷安
例	50　曷読作何
地域	遷安　大名
例	51　合読作何
地域	遷安　大名
例	52　盍読作何
地域	遷安　大名
例	53　狄読作低
地域	遷安　献
例	54　笛読作低
地域	遷安　献
例	55　敵読作低
地域	遷安　献　元氏
例	56　糴読作低
地域	元氏
例	57　則茲柯切
地域	遷安　献
例	58　達読作打平声
地域	遷安　献　元氏

例	59　握読作臥
地域	遷安　献
例	60　沃読作臥
地域	遷安　献
例	61　立読作利
地域	遷安　献　元氏　獲鹿
例	62　力読作利
地域	遷安　献　元氏
例	63　織読作之
地域	遷安
例	64　律読作慮
地域	元氏　獲鹿
例	65　獄読作遇
地域	元氏
例	66　発夫娃切
地域	遷安　献
例	67　罰夫娃切
地域	遷安　献
例	68　伐夫娃切
地域	遷安　献

例	69　髪夫娃切
地域	献
例	70　式読作世
地域	獲鹿
例	71　潔吉耶切
地域	献
例	72　捷吉耶切
地域	献
例	73　奪読作多
地域	献
例	74　説樹窩切
地域	献

《中原音韻》では入声の消失を示しており、伝統的入声韻はすべて他三声に派入したことになっている。この所謂「入派三声」を中古音声母の清濁の方面からみると、全濁声母→陽平、次濁声母→去声、清声母→上声となり、陰平声には派入していない。現代北京語を標準としてみると、およそは、全濁声母→陽平、次濁声母→去声となっており、清声母については明確な派入条件はない。(注5) この近世と現代の尺度をもって「表Ⅰ」に考察を加えてみる。

まず、1、2、3、4、5、6例を帰入状況が同じなのでまとめてみる。各々帰入している「西」は清声母であり、《中原音韻》では陰平声の斉微韻にある。現代北京語（以下「現代音」とする）でも陰平声（第一声）で

ある。「夕」、「習」、「席」は全濁声母であるから《中原音韻》では陽平声の斉微韻に帰入している。現代音では「夕」は例外として陰平声であるが、「習」、「席」は陽平声（第二声）である。「昔」、「息」、「錫」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では、いずれも陽平声に帰入している。各例とも現代音の同調類に帰入しているので、現代音にやや近いといえる。

7から10例をまとめてみる。各々帰入している「幾」は清声母であり、《中原音韻》では陰平声の斉微韻にある。現代音でも陰平声である。「極」、「及」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の斉微韻に帰入している。現代音では、陽平声である。「吉」、「急」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では、陽平声に帰入している。7から10例の情況も1から6例の情況と同じといえる。

11、12例をみる。「路」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の魚模韻にある。現代音でも去声（第四声）である。「禄」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の魚模韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。「陸」も次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の魚模韻（拗音）に帰入している。現代音でも去声に帰入している。二例とも同じ声調への帰入情況で、《中原音韻》と現代音を比較してもあまり変化はないが、「陸」（遷安、献地域）は《中原》では未だ拗音であるのに対し、ここでは既に現代音と同じく合口韻となっている。

13例をみる。「哥」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の歌戈韻にある。現代音でも陰平声（第一声）である。「割」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例もより現代音に近いといえる。

14から20例をまとめてみる。「愈」は次濁声母で《中原音韻》では、上声の魚模韻にある。現代音では去声である。「欲」、「玉」、「浴」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の魚模韻に帰入している。現代音で

も去声に帰入している。「遇」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の魚模韻にある。現代音でも去声である。結果からいえばいずれも現代音に近いといえる。しかし、「愈」は伝統的に上声であり、この時代において上声であったのか、去声であったのかはっきり理解しなければ、一概に現代音に「近い」と明言できない。元氏地域においては、「遇」のように伝統的去声字をもって音注している。また、「愈」が去声になる時期であったともいえる。

21から25例をまとめてみる。「都」は清声母で《中原音韻》では陰平声にある。現代音でも陰平声である。「東胡切」の「東」は清声母で、「胡」は《中原音韻》では陽平声の魚模韻である。現代音でも陽平声である。「読」、「独」、「涜」、「犢」、「毒」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻に帰入している。現代音でも陽平声に帰入している。各例とも現代音の同調類に帰入している情況は、1から6例と近似しているが、献地域において反切を用いて音注していることに特別な意味があるのだろうか。1から6例にしても、7から10例にしても平声をどのように認識(陰陽の別、献県ではこれをよりはっきりさせようとしたのか）していたのか問題である。

26例をみる。「要」は零声母（影母、清声母）で《中原音韻》では、陰平声と去声がありいずれも粛豪韻にある。現代音でも陰平声と去声がある。「瘧」は次濁声母であるから《中原音韻》では去声の粛豪韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。

27例をみる。「輝」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の粛豪韻にある。現代音でも去声である。「薬」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の粛豪韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。

28と29例をみる。「夜」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の車遮韻にある。現代音でも去声である。「葉」、「業」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の車遮韻に帰入している。現代音でも去声に帰入して

いる。

30と31例をみる。「烏」は零声母で《中原音韻》では、陰平声の魚模韻にある。「巫」は次濁声母で《中原音韻》では、陽平声の魚模韻にある。現代音では、「烏」、「巫」とも陰平声である。「屋」は零声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例は現代音に近いといえる。

32例をみる。「咱」（比較的新しい言葉＝文字であり中古音期には存在しない。《広韻》にも記載がない）は《中原音韻》では、陽平声の家麻韻にある。現代音でも陽平声である。「雑」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の家麻韻に帰入している。現代音でも陽平声である。

33から35例をみる。「居」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の魚模韻にある。現代音でも陰平声である。「局」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の魚模韻に帰入している。「菊」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。「橘」は《中原音韻》に記載がない。現代音では「局」、「菊」、「橘」はいずれも陽平声に帰入している。この例も前述の平声の認識の問題である。

37から40例をまとめてみる。「時」は全濁声母で《中原音韻》では、陽平声の支思韻にある。現代音でも陽平声である。「十」、「石」、「実」、「拾」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の斉微韻に帰入している。現代音でも陽平声に帰入している。支思韻の韻母（－ï）と斉微韻の韻母（－i）は現代音では－iに合流している。

41例をみる。「初」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の魚模韻にある。現代音でも陰平声である。「出」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例もより現代音に近いといえる。

42例をみる。「膩」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の斉微韻にある。現代音でも去声である。「匿」は次濁声母であるから《中原音韻》で

は、去声の斉微韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。

43例をみる。「巴」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の家麻韻にある。現代音でも陰平声である。「八」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の家麻韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

44と45例をみる。「区」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の魚模韻にある。現代音でも陰平声である。「屈」、「曲」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

46例をみる。「師」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の支思韻にある。現代音でも陰平声である。「失」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

47例をみる。「多」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の歌戈韻にある。現代音でも陰平声である。「掇」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の歌戈韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

48例をみる。「妻」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の斉微韻にある。現代音でも陰平声である。「七」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

51と52例をみる。「何」は全濁声母で《中原音韻》では、陽平声の歌戈韻にある。現代音でも陽平声である。「合」、「盍」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の歌戈韻に帰入している。現代音でも陽平声に帰入している。

53から56例をまとめてみる。「低」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の斉微韻にある。現代音でも陰平声である。「狄」、「敵」、「笛」、「糴」

はいずれも全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の斉微韻に帰入している。現代音でも陽平声に記入している。　57例をみる。「茲柯切」の「茲」は清声母で、「柯」は《中原音韻》では陰平声の歌戈韻である。現代音でも陰平声となる。「則」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の皆来韻に帰入している。現代音では陽平声に帰入している。この例はやや現代音に近いといえる。

58例をみる。「打平声」は《中原音韻》では家麻韻となる。「達」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の家麻韻に帰入している。現代音でも陽平声に帰入している。　60例をみる。「臥」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の歌戈韻にある。現代音でも去声である。「沃」は清声母（零声母）であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。現代音では去声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

61と62例をみる。「利」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の斉微韻にある。現代音でも去声である。「立」、「力」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の斉微韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。

63例をみる。「之」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の支思韻にある。現代音でも陰平声である。「織」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

64例をみる。「慮」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の魚模韻にある。現代音でも去声である。「律」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の魚模韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。

65例をみる。「遇」は次濁声母で《中原音韻》では、去声の魚模韻にある。現代音でも去声である。「獄」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の魚模韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。

72例をみる。「吉耶切」の「吉」は清声母で、「耶」は《中原音韻》では陽平声の車遮韻である。現代音でも陽平声となる。「捷」は全濁声母であ

るから《中原音韻》では、陽平声の車遮韻に帰入している。現代音でも陽平声に帰入している。

73例をみる。「多」は清声母で《中原音韻》では、陰平声の歌戈韻にある。現代音でも陰平声である。「奪」は全濁声母であるから《中原音韻》では、陽平声の歌戈韻に帰入している。現代音でも陽平声に帰入している。この例も平声の陰陽の認識問題である。

74例をみる。「樹窩切」の「樹」は全濁声母で、「窩」は《中原音韻》では、陰平声の歌戈韻である。現代音でも陰平声である。「説」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の車遮韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。この例も現代音に近いといえる。

36例の「雹」、49例の「漆」、50例の「曷」、59例の「握」、66から69例の「夫娃切」の「娃」、70例の「式」、71例の「潔」の各字例はいずれも《中原音韻》に記載がないので省略したが、36例に平声の陰陽の問題が残るとしても、他はみな現代音に近いと思える。　中古音における声母清濁の点から入声の帰入情況をみたが、これらの例をみる限り入声の存在はないといえる。清声母と次濁声母に関しては、ほとんど現代音と同様の帰入情況となっている。しかし、全濁声母に関しては特徴的である。全濁声母は《中原音韻》にしても現代音にしても陽平声に帰入するのが原則であるが、1、4、7、21、22、23、33、36、53、54、55、56、58、73の各例は陰平声に帰入していて、24、25、37、38、39、40、50、51、52、67、68の各例は陽平声に帰入している。これは前述の平声の陰陽の認識問題であろう。読若という音注方法にも限界があろうし（陽平声で音注しようにも陽平声の例が中古音においてほとんど入声韻であった。陽平声に帰入させた例は、適当な伝統的陰声韻の例が偶々あったにすぎない。このことからも各例において入声は存在しないといえる）、平声を陰陽に分ける意識は働いたと思われるが、それよりも平声を「平声」という一つの範疇で一元的にとらえた結果であろうと思われる。

II　声調面における特殊帰入例について

表II

例	1　錫読作洗
地域	内丘　定　平山　新楽　贊皇
例	2　郁読作於
地域	新楽　元氏　霊寿　平山　定　贊皇　寧河
例	3　麦読作買
地域	霊寿　内丘　平山　新楽　贊皇　寧河
例	4　一読作以
地域	霊寿　平山　元氏　新楽　贊皇
例	5　一読作意
地域	内丘
例	6　屋読作烏上声
地域	新楽　霊寿
例	7　六読作留
地域	大名
例	8　六読作柳
地域	内丘
例	9　甲読作家
地域	大名

例	10　赤読作痴
地域	大名
例	11　屑読作邪
地域	遷安
例	12　笏荒胡切
地域	遷安　献
例	13　楫読作計
地域	遷安
例	14　識読作是
地域	遷安
例	15　識読作止
地域	遷安
例	16　霍読作火
地域	寧河
例	17　室読作史
地域	献
例	18　識読作史
地域	献
例	19　失読作史
地域	献

例	20　戟読作府
地域	献
例	21　紱読作府
地域	献
例	22　弗読作府
地域	献

これら各例についても《中原音韻》と現代音を以て比較検討する。

1例をみる。「洗」は《中原音韻》では上声の斉微韻にある。現代音でも上声である。「錫」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。「錫」は献、玉田、寧河、大名、遷安の地域において表Ⅰの3例では、陰平声にしている。陰平声に帰入している地域は河北省の南北東側であり、1例の地域は河北省の南西側である。この例は南西側の地域では、現代音より《中原音韻》に近いといえる。

2例をみる。「於」は《中原音韻》では、陰平声の魚模韻にある。現代音では陽平声である。「郁」は零声母（清声母）であるが《中原音韻》では、去声の魚模韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。地域的方音特徴であろう。

3例をみる。「買」は《中原音韻》では、上声の皆来韻にある。現代音でも上声である。「麦」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の皆来韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。また、「麦」を遷安、献、元氏、獲鹿、定でも取りあげているが、これらの地域では「麦読作売」と音注している。「売」は《中原音韻》では、去声の皆来韻にあり、現代音でも去声である。1例のような河北省東西の方音特徴ではなく、

地域的方音であろう。

4と5例をみる。「一」は零声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。「以」は《中原音韻》では、上声の斉微韻にある。現代音でも上声である。この例は、これらの地域においては《中原音韻》に近いといえる。「意」は《中原音韻》では、去声の斉微韻にあり、現代音でも去声であることから、5例は内丘地域における方音であろう。また、「一」を献、遷安、大名でも取りあげているが、これらの地域では「一読作衣」と音注している。「衣」は《中原音韻》では、陰平声であり、現代音でも陰平声である。このことから「一」は1例のように河北省東西の方音的差異がややあるといえる。

6例をみる。「屋」は零声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。現代音では陰平声に帰入している。ここでは上声に帰入している。表Ⅰの30例では献、大名、贊皇の地域で陰平声に帰入させている。「屋」に関しては新楽、霊寿地域において《中原音韻》に近いといえる。

7と8例をみる。「六」は次濁声母であるから《中原音韻》では、去声の尤侯韻に帰入している。現代音でも去声に帰入している。「留」は《中原音韻》では、陽平声の尤侯韻にあり、現代音でも陽平声である。「柳」は《中原音韻》では、上声の尤侯韻にあり、現代音でも上声である。また、「六」は遷安、献、獲鹿、元氏でも取りあげているが、遷安と献はともに「六読作溜」と音注している。「溜」は《中原音韻》でも現代音でも平声と去声があるのではっきりしない。獲鹿と元氏はともに「六読作劉去声」と音注しているので、これは現代音に近い。このように「六」は平声、上声、去声に帰入しているので、各地域の方音と考えられる。

9例をみる。「家」は《中原音韻》では、陰平声の家麻韻にある。現代音でも陰平声である。「甲」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の家麻韻に帰入している。現代音でも上声に帰入している。

10例をみる。「痴」は《中原音韻》では、陰平声の斉微韻にある。現代音でも陰平声である。「赤」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では去声に帰入している。

11例をみる。「邪」は《中原音韻》では、陽平声の車遮韻にある。現代音でも陽平声である。「屑」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の車遮韻に帰入している。現代音では去声に帰入している。

12例をみる。「荒胡切」の「荒」は清声母で、「胡」は《中原音韻》では陽平声の魚模韻である。現代音でも陽平声である。「笏」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の魚模韻に帰入している。現代音では去声に帰入している。

14例をみる。「是」は《中原音韻》では、去声の支思韻にある。現代音でも去声である。「識」は清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では陽平声に帰入している。

17から19例をみる。「史」は《中原音韻》では、上声の支思韻にある。現代音でも上声である。「室」、「識」、「失」はいずれも清声母であるから《中原音韻》では、上声の斉微韻に帰入している。現代音では「室」は去声に帰入しており、「識」は陽平声に帰入しており、「失」は陰平声に帰入している。

13、15、16、20、21、22の各例は《中原音韻》に記載がないので省略した。

ここでは全濁声母の例がない。次濁声母と清声母の例ばかりである。次濁声母の例は1、3、7、8の4例あり、1、3、8の例では上声に帰入している。これらの地域は3例で説明した河北省南西部の地域である。7例は平声に帰入していて、これは3例で説明した所の東部に属する大名である。上記4例以外は清声母の例である。平声に帰入する例が2、9、10、11、12の5例で、西部東部の差は見受けられないようである。上声に帰入する例は4、6、15、16、17、18、19、20、21、22の10例で、これも西部

東部の地域的差はないとかんがえられる。去声に帰入する例は5、13、14の3例で、例が少ないので地域的な差はなんともいい難い。

次濁声母の上声への帰入は特徴的で、方音といえる。しかし、清声母の平声、上声、去声への帰入は、上声へ帰入する場合は《中原音韻》に近いといえるが、清声母入声が現代音に至る明確な帰入条件がないことを考えると、これらの資料は、《中原音韻》と現代音の中間に位置するものとも考えられるし、全くの方音的特徴とも考えられる。

注1　《中原音韻・正語作詞起例》中に「入声派入平上去声者以広其押為作詞而設耳然呼吸言語之間還有入声之別」とあり、実際は地域的には入声は依然として存在したのであろう。

注2　《古今韻会挙要》では入声を独立させて韻目をたてているが、質韻には国、菊、穀、緝韻には櫛、陌韻には聿、合韻には葛、葉韻には結、洽韻には戛などが所属しているので、《切韻》音系入声韻尾の～p、～t、～kの別は存在しないといえる。

注3　《洪武正韻》は10の入声の韻目をたてているが、《古今韻会》同様に入声韻尾～p、～t、～kの別は、時代的にもないと考えられる。王力著《漢語音韻学・第四編　本論下・第六章・第三十九節　洪武正韻》(中華書局、1972年4月）中に「洪武正韻之編者、為的是反対沈約的呉音、而書中却包含着許多呉音的成分」とあり、呉方言の影響を強く受けたとすれば、入声韻尾は喉頭閉鎖音に集約されたものと考えられる。

注4　楊耐思著《中原音韻音系・五（四）据現代方言考訂中原之音的入声》(中国社会科学出版社、1981年10月）中に、「**从1955年开始，对全国汉语方言进行了一次普查．普查结果表明，北方话区域有很大一个地区还保存入声．即东起河北省西部，包括张家口，石家庄，邯郸三个地区，西至陕西省的榆林，绥德，延安三个地区，南至河南省新乡地区，北至内蒙古自治区的平地泉，河套两个地区**」を参照。

注5　王力著《漢語史稿・上冊》(科学出版社、1958年8月）第二十九節　声調従中古現代的発展、(三）入声的消失　196頁～197頁を参照。